慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新資料咄本『軽口こらへ袋』解題・翻刻
Sub Title	A hitherto unedited printed text of Karukuchi koraebukuro : a transcript with introduction of an Edo period hanashibon
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko) 石川, 俊一郎(Ishikawa, Shunichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1986
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.48, (1986. 3) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00480001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新資料
咄本『軽口こらへ袋』解題・翻刻

檜谷昭彦
石川俊一郎

解題

1

ここに紹介する新資料の咄本『軽口こらへ袋』は、現在までその全容がほとんど知られずに書名のみが報告されていた咄本である。本書は二十年ほど以前に、檜谷が一括して購入した草雙紙類十数点のなかに含まれていたもので、以後檜谷の怠慢もあって紹介する務めを延引しつつ今日に至った。

近時、ようやくにして咄本にたいする文献も重視され、研究も盛んになっている。幸いに慶應義塾の研究室にも石川俊一郎という咄本研究者が生まれたので、調査と報告を主として石川に担当して貰い、それを檜谷が検証するという作業によって、今回、本書の全容を掲載することとした。後述するように、本書は改装本であり、題簽も後補、さらに書名を間違えており、手摺れの多い粗末な書物であるが、他にその所在を聞かない以上、これを紹介して大方の研究に資

するのも意義なしとしないだろう。それに享保年代の江戸における咄本という点も、咄本刊行史のうえでいささかの空隙を埋める作業につながるかも知れぬ。それが本書紹介の理由である。

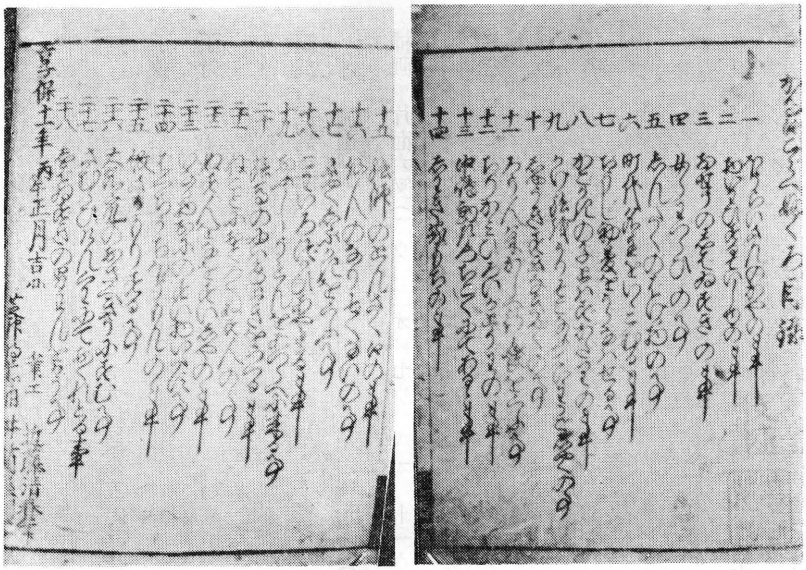
さて本書は露の五郎兵衛作『露五郎兵衛新はなし』（元禄一四年刊・一巻一冊）の改題本とされてきた(1)。木村捨三氏は「近藤清春が『露の五郎兵衛新はなし』（元禄十四年板）を享保十一年に『軽口こらへ袋』と改題して、これに画いたのがある」(2)と述べられたが、その他は僅かに宮尾しげを氏が「軽口こらへ袋　一　露五郎兵衛　近藤清春畫　享保十一年　タ五、九　ヨ四、二／元禄十四年「露五郎兵衛新噺」の改題本といふ、芝神明前角井筒屋板」(3)と述べられているにとどまる。それもあって現在では、本書は挿画が描き改められたことから、元の板木を使用したものではなく、新たに版をおこしたものと考えられている(4)。しかしながら、本書は元禄一四年の洪水・雷の話を中心とした『露五郎兵衛新はなし』とは全二八話とも全て別内容のものであることは、翻刻本文によってみれば分明であろう。露の五郎兵衛の作品はこれまで宮尾與男氏により、現在判明している四六三話が紹介・翻刻され(5)、話題總索引も作成されている(6)が、さらに今回新たに二八話を追加できることになる。次に書誌を記す。

2

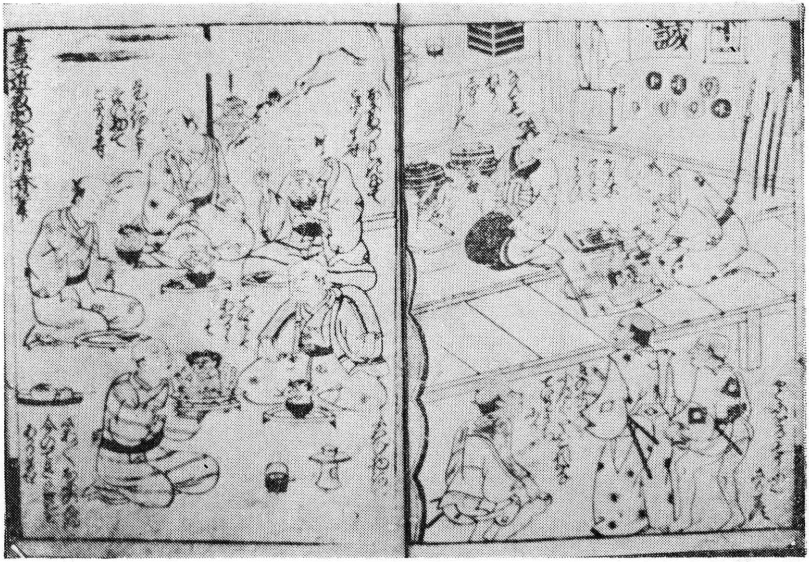
表紙　改装後補　濃茶色地に鎖模様空押　タテ17・9、ヨコ13・1センチ

題簽　後補　無枠短尺形黄色紙　表紙左肩「輕口笑袋　全」（墨書）　タテ14・5、ヨコ2・9センチ（この題名は誤まりである）

目録題　「かる口こらへふくろ目録」



目録(1オ・1ウ)



挿画(7ウ・8オ)

内題・尾題　ともになし

刊記　一ウ目録一四行に続き、「享保十一年丙午正月吉日　筆工近藤清春筆／芝神明前角井筒屋開〔板〕」、二八丁ウ一三行に続き、「右此咄之本大坂露の五郎兵衛咄之本ヲ写板行合者也　芝神明前井筒屋板元」とある

丁数　一三丁（うち目録一丁）

丁付　一～十三

行数字数　毎半葉一四行　毎行約四〇字　漢字平かな交り　まま振りがなあり

匡郭　四周単辺　タテ15・9、ヨコ11・7センチ

柱刻　〈こらへ　一（～十三）〉

挿画　片面六図（二ウ　三オ　七ウ　八オ　十一ウ　十二オ）　版式としては見開きだが左右の挿画は雲形によってそれぞれ区切られ、別図になっており、八オに「畫工近藤助五郎清春筆」と署名がある

印記　「豊芥／（象の絵）」（方形朱印）「きりさわ／文庫」（方形朱印）、ともに一オ

話数　二八話

備考　天地截断、総裏打

3

本書『軽口こらへ袋』の版元である井筒屋は、清水堂と号した江戸芝神明前横町に店を構えた井筒屋忠左衛門。井上隆明氏の『近世書林板元總覧』では、延宝・天和ごろから井筒屋は赤本の版行にたずさわっていた由だから、その赤本

の絵師のひとりである近藤清春が、本書の挿画を描くことは充分に考えられることである。

絵師近藤清春は『浮世絵類考』では「江戸の産にして赤本金平絵本などを書く、正徳享保の頃也。三馬按、清春は吉原細見記、并芝居狂言本等、自畫にて數多開板せり」とのことで、清春の関係した咄本は、私たちの知る限り、次に掲げる一書の他はない。それは享保一五年刊『おけさはなし』で、書型は中本、『日本小咄集成』上巻口絵に本文と挿画が載せられている。ところで、本書『軽口こらへ袋』と右の『おけさはなし』の二書がともに中本であることは注目に値する。即ち、享保年間に刊行された咄本は宮尾しげを氏によれば全部で二九部(7)、そのうち調査し得た二〇部は当該の二書を除き全て半紙本であり、更に宮尾氏目録に洩れる『軽口扇の的』・『加留口聞盃』・『水打花』・『かる口大笑遠慮』・『軽口売正月』・『軽口そろま人形』も全て半紙本であった。このことから半紙本五巻五冊の形態が流行したと考えてもよい享保年間の咄本出版界において、『軽口こらへ袋』・『おけさはなし』にみられる中本型式は、かなり異色のものであり、おそらくは赤本の影響を受け、挿画に重きを置いた書型であると考えてもいいだろう。

本書には本文末以外に、目録末に刊記がある。漢籍では本文末や奥付以外に刊記があることは稀ではないが、草紙本においてこういう位置に刊記があることは珍らしい。

露の五郎兵衛は、貞享頃に京四条河原や北野天満宮などの盛り場に集まる人々から代銭を取り辻咄(落し咄)を聞かせた、いわば咄家の元祖とでもいうべき人物だった。その考証については各務支考の『本朝文鑑』(享保三刊)、山東京伝の『近世奇跡考』(文化元刊)、柳亭種彦の『足薪翁之記』(写本)をはじめ、前田勇氏の『改訂増補上方落語の歴史』(昭和四一年)、肥田晧三氏の「上方落語史の諸相」(『国文学』昭和四九年九月)、関山和夫氏の「露の五郎兵衛」(『落語界』昭和五三年五月)、宮尾與男氏の「露の五郎兵衛と豆蔵」(『芸能』昭和五四年四月)などに示唆に富む考勘があるから、

彼の略歴については触れることをやめる。ただ一つ五郎兵衛の没したのは『露休置土産』(宝永四年)序に「都の名物。入道露休。過にし元禄ひつじの秋。閻浮をさりし」とあるごとく、元禄一六年秋であったことをここでは確認しておこう。

武藤禎夫氏が述べておられるように(8)、五郎兵衛の咄本は出版を目的として読まれるために創られたものではなくて、辻咄のための「咄の控え帳」がそのまま本となったものと考えられるのである。とくに五郎兵衛没後の『露休置土産』の序につけば、「露休が一生。はなしのひかへ帳をくりひろげ。いまだ世間の人に。わらはせぬ噺を取あつめ。舊きはえりすて。あたらしきをひろひ寄て。露休置土産と名付。全部五巻として」とあるごとく、明らかに舌耕の文芸を編輯し梓にのぼせた典型的な五郎兵衛作咄本ではあった。だから同時に五郎兵衛の咄は際物咄・談義咄を除いてしまえば、先行咄の再利用が目立ち、創作性に乏しいと評価されるゆえんでもある。

4

では右のような状況のなかで、本書『軽口こらへ袋』が刊行された享保一一年(一七二六)という年を考えてみたい。この時期浮世草子の刊行はいぜん盛んであり、浄瑠璃も出雲・一風・千四・宗助などが近松没後(享保九年)のあとに活躍していた。樗山の『田舎荘子』は翌享保一二年だし、当年(一一年)江戸の出版界にさしたる刊行物はない。そこで咄本のうち露の五郎兵衛の名が冠せられた咄本の刊行とその書名を年代順に整理してみよう。書名の上に数字を付したのは刊年順を示し、アルファベットは同一種類の後印を意味する。〔 〕印は推定出版元号である。

一―A　**露がはなし**　半紙本五巻五冊　元禄四年刊　版元不詳

一—B **同**　同　〔宝暦〕刊　京　梅村判兵衛　一—Aの丁数・話数を縮少している

二—A **懸合咄**（露鹿）　半紙本五巻五冊　〔元禄一〇年〕刊　京　和泉屋長兵衛・菊屋七郎兵衛

二—B **かる口利益咄**　同　宝永七年刊　京　菊屋七郎兵衛　二—Aの巻三・四・五を用いる改題本

三—A **露新軽口はなし**　半紙本五巻五冊（現存本は写本のみ）　元禄一一年刊　藤兵衛刊（姓不詳）

三—B **軽口老婆さくら**　同　宝永三年刊　京　木村四郎兵衛・近江屋善兵衛　三—Aの改題本

四　**あたことたんき**（軽口）　小本三巻三冊　元禄一二年刊

五—A **露休はなし**　半紙本五巻五冊　〔元禄一四年〕刊　所在不明

五—B **あられ酒**（当世軽口）　同　宝永二年刊　京　谷村多兵衛・神原理兵衛　五—Aの改題本

五—C **露休はなし**　同　正徳二年刊　所在不明　五—Bの改題本

五—D **軽口笑上戸**　同　〔宝暦・明和〕刊　五—Cの改題本

五—E **我儘草紙二編**　同　嘉永四年刊　秋田屋市兵衛等三都版　五—Dの改題本

六—A **露五郎兵衛新はなし**　半紙本一巻一冊　元禄一四年刊　京　菱屋治兵衛刊　元禄一四年六月一九日の洪水・落雷の話が中心となる全十五話

六—B **同**　同　宝永五年刊　所在不明

七—A **露休しかた咄**（都物名）　半紙本五巻五冊　〔元禄一五年〕刊

七—B **かるくちはなし**（内題）　同　刊年不詳

七—C **軽口千代万載**（扉題）　同　〔宝暦二年〕刊　本文中に「露休」とある部分を「豆蔵」と入木修訂する

七—D　**かるくちはなし**（内題）　同　刊年不詳　七—Cを縮少したもの

七—E　**軽口千代万載**（扉題）　同　同　七—Dを更に縮少したもの

八—A　**露休置土産**　半紙本五巻五冊　宝永四年刊　〔京〕　田井利兵衛

八—B　**当世軽口露休蘇生花**　同　正徳二年刊　同　八—Aの改竄本　覆刻・新刻で再構成し話数も縮少する

八—C　**御まんざい**　同　刊年不詳　版元不詳　八—Bの改題本

八—D　**笑だるま**　同　享保四年刊　同　八—Cの改題本

九　**軽口こらへ袋**　中本一巻一冊　享保一一年刊　江戸　井筒屋忠左衛門

以上のようである。

5

右にみたごとく全九作品のうち七作品までは生前に刊行されている。そして五郎兵衛が元禄一六年（一七〇三）に没したあと、すぐに改題後印本が出版され、没後四年めには『露休置土産』が五郎兵衛の「咄の控え帳」から抄出したという編輯意図をうたって刊行された。それから五郎兵衛作品は享保四年（一七一九）までに、前出二四点中一六点までもが刊行されていたのである。

次いでいまひとつのピークは、後年の嘉永四年（一八五一）刊『我儘草紙二編』を除くとしても、右の享保四年からほぼ三〇年を経た、宝暦年代にあって五点の刊行を数えることができた。とするとどうなるか。つまり、前出一覧表のうち七—B『かるくちはなし』（刊年不詳）を除けば、七—C『軽口千代万載』（扉題による）〔宝暦二年〕刊[カ]、には本文中に

「露休」とあるのを「豆蔵」と入木している事実から商量しても、本書『軽口こらへ袋』は、露の五郎兵衛（露休）という咄し手が読者に遠くなった時点で突然よみがえった出版物ではあった。

『軽口こらへ袋』はみたび言うが享保一一年の刊行に関わる。本書巻末には書誌の刊記の項に記したごとく「露の五郎兵衛咄之本ヲ写板行令者也」と宣伝している。露の五郎兵衛没後四年、すくなくとも一覧表八—Aに記した『露休置土産』五巻五冊は、書肆田井利兵衛、後続の改竄・改題本に証してもたぶん間違いなく上方（京都）の出版本であるはずである。

それでは、享保四年まで上方で出版されていた五郎兵衛物が、享保一一年になってどうして江戸の書肆井筒屋から、近藤清春の絵を多く加えて出版されたのだろうか。しかもここにはたしか上方にあるはずの五郎兵衛「咄の控え帳」（ないし写し）が、書肆の許にあり、それによって本書『こらへ袋』を編んだことになっているのである。今回紙幅の関係もあって井筒屋の出版物にまで報告の手は伸びないが、このあたりは識者の御示教を俟ちたい。

6

いままで述べてきたところでお判りいただけたように、露の五郎兵衛の咄を筆録し刊行した各版の咄本には、先行咄を再活用したり類話を用いたり、やや文章を改変して利用するというような、当期の読者に向けての商業的な出版意図が認められた。本書『こらへ袋』巻末にいう「露の五郎兵衛咄之本ヲ写」という姿勢が、では『こらへ袋』のどこにあるのかというと、それは第二一話の「ねことにおどろくぬす人の事」を『露休置土産』巻一の第一一話にみるだけである。またほかの咄本に出典を探ってみると、第一四話「しわき家もちの事」を正徳二年刊の『新話笑眉』巻二第一〇話「困

つたあいさつ」・享保一一年刊『当流噺初笑』巻一第九話「げすの知恵はあと」に、第二四話「ばくちうちほうもんの事」を貞享年間刊の『当世はなしの本』第一四話「ばくち打長老に成事」に見るにすぎない。とすれば、全二八話のうちほとんどが新作ということになる。それでは五郎兵衛の咄の本の控え帳から引いたという前出の刊語を疑わざるを得なくなる。また本書で唯一の際物咄である第一三話「中嶋勘左衛門ぢごくにてあく事」をみるに、中嶋勘左衛門とは〔元禄六年〕刊『野郎楊弓』(9)に敵役としてはじめてその名を見る江戸の役者であり、山村座・森田座・市村座で活躍し、「まなこのすさまじき」(元禄一三年刊『役者万年暦』)敵役・立役として有名で上上吉の評判をとった役者ではあった。その死没年が享保元年であることは享保二年(一七一七)刊の『役者賭雙六』の記事で明らかである。

とすれば、元禄一六年に没した露の五郎兵衛には、右の当話を創作し聴き手に話すということはまずあり得まい。これは明らかに江戸の歌舞伎芝居の物故した役者の芸名にかこつけた挿話で、読者の歓心を呼ぼうとしているので、本書第二八話「しばゐずきの男わんをかう事」に登場する勝山又五郎にしても、おなじく江戸の立役者であり、そうしてみると上方が主たる舞台だった露の五郎兵衛が、江戸という土地になにほどのゆかりがあったかが、今後の課題となるだろう。

約めて言えば本書には、露の五郎兵衛の作者像はすこぶる薄いのであって、それだからこそ、この咄本の資料的意味は高いということなのである。咄本における作者の存在は、近世草子類のうちでもとくに稀薄であるという論者の目論見は、その間にあって、出版書肆と絵師の存在をすぐれて注目せねばならぬという提案に、ふたたび立ち戻ることを需められているように考えられる。今回は資料紹介という本稿の目的もあるので、本文の内容には触れずに、いちおうの解説に終始した。

【注】

(1) 『訂改日本小説書目年表』(昭52・ゆまに書房)噺本の項に「○輕口こらへ袋　一　露五郎兵衛　近藤清春畫　同(享保十一年)／元禄十四年版「露五郎兵衛新噺」の改題三版」とある

(2) 「噺本の挿絵と鳥居清経」(『小はなし研究』第四号)

(3) 「初期噺本の調べ」(『小はなし研究』第一号)

(4) 宮尾與男氏「近世咄本研究上方咄家の咄本(4)」(『上方芸能』第三三号)、同氏「露の五郎兵衛咄本作品攷――書誌を中心に――」(『語文』第五六輯)、岡雅彦・武藤禎夫氏編『噺本大系』第六巻解題

(5) 『上方芸能』三三～三六、三八～四五、五三～五五、七七、七八、八〇号

(6) 『上方芸能』八〇・八一号

(7) 「定本笑話本小咄本書目年表」(東洋文庫192・196『江戸小咄集』所収、平凡社)

(8) 『日本古典文学大辞典』第四巻(昭和59・岩波書店、露の五郎兵衛の項)

(9) 『歌舞伎評判記集成』第一巻(昭和47・岩波書店、以下の評判記類も同集成による

〔付記〕この解題は石川俊一郎が草稿を記しそれに檜谷昭彦が私見を加え、且つ全文の意匠をととのえた。したがって文責は檜谷が負うものとする。

〔補記〕なお私たちは本書の題簽に記された『軽口笑袋』の行方についても関心を有している。本書がなぜ『笑袋』と誤記せられたか、では『笑袋』の内容はどうか。これが当面の課題である。

翻　刻

〔凡　例〕

一、翻刻にあたっては、忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものとするよう努力した。その方針は概ね次の通りである。

一、本文の行移り・丁移りは底本に従わなかった。ただし、各丁の終りにあたる所に、版心の丁付により丁数及び表裏の別を括弧内に漢数字と〃オ〃〃ウ〃で示した。
一、句読点は、読み易さを考え、私に施した。
一、仮名の字体は現行の平仮名に統一した。
一、仮名遣は混乱しているが、底本通りとし、歴史的仮名遣には改めなかった。
一、漢字は新字体を用いた。
一、特殊な草体・略体は通行の文字に改めた。
一、手ズレ等で判読できない部分は□で示した。
一、なお翻刻の基礎作業については、石川俊一郎が担当した。

かる口こらへふくろ目録

一　ほうらいさんのかやの事
二　物いわひするていしゆの事
三　おせうのしばゐすきの事
四　女郎わづらひの事
五　しんたくのばけ物の事
六　町代名主をいゝこむる事
七　ぢうじ初夢をうらなはせる事
八　かごかきの子とはずかたりの事

九　かけ絵をうりそこなふてい主かごしやくの事
十　しやうきすきなきやくの事
十一　ろう人米がしへ行食をくふ事
十二　ちりかみひろいがとうわの事
十三　中嶋勘左衛門ぢごくにてあく事
十四　しわき家もちの事
十五　絵師のとんさく口の事
十六　仙人のなりぞくないの事
十七　きやくしぶかきをくふ事
十八　こわいろづかひあやまる事
十九　おふしうどんをあつらへに来る事
二十　絵馬のには鳥ときをつくる事
二十一　ねことにおどろくぬす人の事
二十二　ぬす人をなをすいしやの事
二十三　いなか物おにのすい物いたす事
二十四　ばくちうちほうもんの事
二十五　蚊さかもりする事

（一オ）

二十六　大名衆のおさへきうにすむ事
二十七　さむらひけんくわにておくれとる事
二十八　しばゐずきの男わんをかう事

享保十一年丙午正月吉日　筆工　近藤清春筆
芝神明前角井筒屋開□（一ウ）

一　ほうらいさんのかやの事

▲さる人かやをもとめけるに、とも立みて、よきかや也、といふ。壱人が云けるは、われらはおやよりつたはつたるほうらいさんといふかやをもつたり、といへば、是はめつらしき事也、いざ行てみばやとつれだち行けるに、くだんのかやをみせんと、つゞらよりふるきかやを取いたし、是み給へとみせければ、友だちあきれて、此やぶれかやをなぜほうらいさんとつけ給ふそ、といふ。其時こたへて、此かやのいとくはこらんのことくやぶれ候へとも、つるとかめがまひあそぶ、といふたもおかし。

二　物いわひするていしゆの事

▲さる所に物いわいする男有。女房正月のざうにのなかへ金一分入、出しける。てい主くいあて、餅の内に石有とみれ

は金也。是はめでたや、ことしより金持と云事、と悦いはひけり。所へそさう成人来りて、何事、ととふ。もちの中に金有、是程めでたき事なし。かね持に成とて悦べは、此おとこかしらをふり、いや〳〵いわひやるな、もちかねるといふことじや、といふた。

三　おせうのしばゐすきの事

▲さる所のよそのてらに、しばいすきなるおせう有けるか、さみしさの折節には(二オ)(二ウ・三オ挿画)とうしゆく共をあいてにし、いとひんやつこのすがたとなりてさはかれけるが、けふしも雪ふり物さひしければ、いざや物まねしてなぐさまん、といつものことくどうしゆくをまねき、それ〳〵の役わりをさだめ、おせうもべにゝてかほそめ、かづらかけてさはかれしに、折しもわう生人をかき入て、とむらひのせしや仏をく□んへかき入ける。どうしゆくおとろき、いそきおせうまへゝ行、そんぢやうその方より仏がまいりました。あれ〳〵とむらい衆かまいります、といゝければ、おせうぬからんかほて、なんじやとむらいかきた、よい〳〵、とむらいどもこうまいれ〳〵、といふておくへにげられしも、よきしばゐのとうはにておかし。

四　女郎わづらひの事

▲よし原に何丁何やの女郎によしきよといふて、はやりでの女郎ありしが、よかぜにでもひきなんか、うちふしみせを

引ける。ふうふおどろき、いしやをよひよせけるに、程なふいしや来りて、みやくをとりて何共心得がたく、なんとし給へはまいるか、ととふ。女郎こたへ、へつしてしよくもかはり候事御ざなく、とこたへけり。おなかの心もちいかゞときゝければ、はらもつねのとをり、とこたへり。しからはつはひへますか、といゝければ、女郎ぬからぬかほにて、きやく衆は何共いわれませぬ、といふたもいきすきておかし。（三ウ）

五　しんたくのばけものゝ事

▲さる人しんたくへうつられけるに、とも立いへみに来りて、是はまたかべもひぬと□□間あましけ成は、しつをひきこみめさるな。そうじつをはやふたき給へ、といゝけれは、□もさこそと思ひ、そうじつとゝのへたり。いざたかん、とてひた物たきけるが、ふしきやけふりの中よりさもすさましき大入道あらはれたり。両人さはかすこへをかけ、何物なるそ、ととといければ、我はゐんの下のしつけだ、といふ。しつけかなせでた。そうじつたはんのしよもふ、といふたもおかし。

六　町だい名主をいゝこむる事

▲さるうつけなる名主ありけるが、遠所よりひたしき衆二三人もよふして、よはなしにいかれけるか、名主も内にいやはせはなしけるが、中に年寄たる人いゝけるは、たでといふ物はからきをもつてしやうくわんす。それゆへゐみやう

を、りかうそうといふも事はり。何れりこうになる物也。まためうがをふかくくへば、ばかになる物也。それゆへめうがのいみやうを、どごんさうとな付るもことはり、といろ〳〵取まきれたるはなしなとして帰りける。あとにてかの名主、是はよき事をきゝたり。我も人へのおしへのため成はためしてみん、とたでを(四オ)取よせ、ひた物にくいて、もはやりかうになりつらんとしはらくかんがへみれ共、さらにりかうも出ねば、まためうかを取よせ、ひた物くいてしばらくと、やうだいをかんかへ、是もばかにもならす。何れ皆いつわり也、といそきてう代をよひ、町中しはひの内一切たでとめうがくふへからす、とふれらるへしいゝければ、町たい聞、是はいか様成事や、と申せは、去ればそのこと、たでをくへはりかうになると申す。又めうがをくへはばかに成よし云つたふるよし、我たでもめうがもくいくらへけれど、りかうにもばかにもならす。それゆへしはひへふれられよ、と申せはてうだい聞て、扨はおまへもめうがのほうがまはりました、といふた。

七　住持初夢をうらなはせける事

▲ある浄土寺の住持(ぢうじ)初夢をみける。あまり心がゝりとて、したしき上手のう〔ら〕ないしやをよひ、夢のやうたいかたりける。まづ大きなるさる五つに、うへにてぬくひのかけ有夢をみたるよし、と申せは、さんをきしはらくかんがへ、吉さう成夢にて候。然し手ぬくひ心かゝり成か、それ共随分と心いわひしゆへ、といふてさんおきは帰りぬ。その夜、寺の一旦那方より使来り門をたゝきける。ぢうし立出しさいを聞ば、主人相はて申候。然しゆいごんニて御座候在。とふらの義は法花寺にて任。貴僧様には御くやうなされ下さるへしと御しら(四ウ)せのため参候、と使はやかて帰りけり。

住持にかく敷も、大事の一旦那をた□□□□□是は正しく夕へみし夢はまさゆめにはあらず、と腹立なからさんをきをよひよせ、大きにしかりて、夢はいか様にはんじ給ふや。きつそうとの給ふか、吉そうにあらす、と右のあらましかたりけれは、さればこそ、てぬぐいがきがゝり候と申たは此事、五つのさるはきつそうニて候と申事はこさるとみせて、ほうかぶりと申てぬくひかきにかゝりました、といふた。

八　かこかきの子とはずかたりの事

▲さる所に絵かき有けるに、やしき方のあつらいとし、しくひやうふにふしさんをかきける。中く一きは出来ければ、しばしなかめいたりける所に、子共二三人来り、かのひやうふのふしをともくなかめていふ。此はなんとよふてきたな、といへば、一人の子共いゝけるは、おらがとゝ様のいわしやるは、山といふ物はかきにくき物といはしつた。絵師是を聞て、そなたのとつ様もゑかきか、ととふ。いや、かごをかゝつしやるが、そうたい山さかはかきにくき物たといわしやた、といふたもおかし。

九　かけ絵をうりそこなふてい主がこしやくの事

▲さる所に、小道具やのみせに人丸のかけ絵有けるか、その所をれきくの侍(五才)通りかゝり、かのさふらい衆立より、人丸の絵像打ながめねだんをとはれけれは、折節てい主留守ニて、女房立出あいさつし、ねだん五両と申せは、四

両に付られける。女房心の内にてねうり致た、とまけにけり。侍いわれけるは、今日は金子もちあはせす。まづ手付を壱両をく程に、明日残りを渡さん、と金子を渡して人丸のゑをつく〳〵とみ、扨も上手にかきたり。然し口もとがあく。是てもよい、といふて帰りけり。程なふてい主帰れば、女房よろこひ、是のふ人丸の絵をけふ侍衆に五両といふたれは、四両ニ付手つけ壱両をき、あす取に参るはつ。然し口もとがよけれは、と申されしが、口もとかよくはまつと出しませうか。口もとをなをし給へ、といふ。てい主心へ、ほんに口もとかわるい、とふでをもつてなをしける。程なく侍来りて、人丸の絵を渡されよ、といへは、てい主立出、いや人丸のゑは女共かそこついたしました。五両よりまけ御さなく、と申せは、侍もぜひなく五両にかい取、かけゑをみて、是はちかふた、といふ。いやちがいわ仕らず、と申せは、されば其事、此人丸はわかの道の御神。其方哥の心はしりめされつらん。ほの〳〵とあかしの浦の朝きりに嶋かくれ行舟をしぞ思ふ、と口をふさき給ふに、此人丸は、あかしのうらの朝きりに嶋かくれ行ふねおしそおもはん、と口をあかれたは何のやくにたゝん、といふて帰られけるもおかし。（五ウ）

十　しやうぎすきなきやくの事

▲有所になしみの客有ける。打たへびんぎなかりければ、女郎もひた物此客の方へふみやれ共、たよりなければ、女郎もきのとくに思ひ、つかひの物をよひいさいを聞ば、たゝせうきをさして御座候ゆへ、いくと参り候へても返事参らす。たゞせうぎかおすきてござ候、と申せば、ぎう立出、あなたはせうぎのおすきはしれた事、といへば女郎聞、そなたかどうしてしる物だ。若いもの聞はて、しれた事、あなたかお出なされてついに二分つかしつた事がない。一分ばかりつ

かしやります。二分はおきらいた、といふた。

十一　ろう人米かしへ行食をくふ事

▲さるまづしきろう人、さかい町をけん物して帰りけるが、殊外ひたるになりしかば、いせ町へかゝり、さるやしきよりはんまいもとめたき、と申せは、手代立出さま〳〵米ざしにて米をさしおはり、みのとていくらもさして出す。ろう人ひだるさあまり、ひた物かみて、なんと是□ふへるがめしのあちはひいかに、ととふ。てたいきゝ、せつしや共大ぜひくらし候ゆへ、朝夕このこめをくたされ候か、大ふんふへ、事にかつてに用ひ、へり申さす。こらんの通り、あのようにめしにたき候、と申付は、ろう人ぬからぬかほにて、なんとそのめしもきいてみたい、といふた。（六オ）

十二　ちりかみひろいがとうわの事

▲さる所のよそにわかき男四五人より合、はなしなどし遊ひける所へ、ちりがみひろひ来るをみて、中にせんしやうなる男云けるは、そちらもかわつた成になつた。ことにちりかみもそのやうなあみにいれては、ちりがみもぬけおちてたまりがあるまい、といへはひにんこたへて、おふせのことく、是もせうじんのたとへのことく、あみのめにもかみとまると申まする、といふたもおかし。

十三　中嶋勘左衛門ぢごくにてあく事

▲こゝに中嶋勘左衛門あいはて、ちこくへ来る。ゑんま御らんし、ぜんざい〳〵、なんぢしやばに有しその時、きやうけんききよとは申せ共、大あく人のやくめゆへ、今八大ぢごくへつかはす也、と仰有。勘左衛門はつとかうへを地に付、仰御尤に存候へ共、拙者かたき役をつとめし事、その昔のきをねは、しつあく事つとめし候へは、いそぎごくらくへ御遣し下されかし、と申上る。大王げきりんまし〳〵、おろかやいつわるまし、まことをてらすしやうはりのかゝみをみよ、との給へは、勘左衛門やかてかゝみにむかへば、ふしきやめんしよくかわつてすさまし く、色あかくまなこ付まておそろしく有しに、ちかはぬかたきやく。勘左衛門(六ウ)もはつとおとろき、さしうつむきていたりける。ゑんまをはしめおに共こへ〳〵に、いや□□さあ、のかれは有まい。あらそふやとつめかくる。勘左衛門、今は是迄、とつつ立あかり、さしやあ、あらはれたよなあ、ゑんまともに、うつてとれ、といふたもおかし。

十四　しわき家持の事

▲さる所に家もち有けるが、方〳〵より店をかりに来りけれ共かさす。小間物やより、店かり申度よし申は、其元には京よりおくり荷参るか、ととふ。なる程参候。いやそれ成は荷つめのわらのこもて店むさく候ゆへ、成申さす候也。又こめや来りて、店かりたきよしいゝければ、そこもとのは朝晩共にからうすのおとにて、いへそんし申候様に思はるゝ、

とて是にもかさす。そのゝち井戸ほりとて店をかりにきたりけれは、小間物やこめやにさへ借シ申さす。まして井戸ほりと聞申てはなをなり申さす候。ことに地行なとたまり申ことではござらす、と申せば、井戸掘聞、いゑ〳〵左様にては御さなく候。あつらへにてさき様へまいりてほり申候ゆへ、地行にはすこしもきすの付申ことてはござりませぬ。ちつとも御きつかいなされますな、と申せは、家主しばらくしあんをして、そんならできあいは御さらぬか、といふた(七オ)(七ウ・八オ挿画)もあんまりねんかいつておかし。

十五　絵師のとんさく口の事

▲さる所のよそにゑかき有けるが、びやうぶをかきける。七人しやうぐをかきけるに、せんしやうなる男絵師にとひけるは、しやうぐと申て是はまた名の有けるや、ととといけるに、絵師こたへて此七人のじやうくはみな名の候、てんしやうぐ、地しやうぐ、ないけしやうぐ、六こんじやうく、火じやうく、水しやうくといゝける。男きき、まだ一人たり申さす、といへば、跡一人は大いそのとらじやうくといふた。

十六　仙人のなりそくないの事

▲ある所に若き物共より合、何れ仙人といふは、しんつうをゑるゆへ身のかるきもの也、といふ中に一人いゝけるは、あれはすをのむゆへ身かかるふ候、といゝけるを、そのなかにうつけなる男是をきゝ、さあらは我も仙人となるへしと、

てうぼすをのみ、月日をおくりける。もはや仙人にも成つらん、と思ひすまし、よふけて人しつまりしやふん、やねへ上り身つくろひして、やねてとひはねしけるか、何とかしたりけんへやあいへこけをつる。人々おとろき、やれぬす人打ころせ、と立さはけは、かの男こへを(八ウ)あげ、人〻さはき給ふなよ。我は仙人のすだちじやといふた。

十七　客しぶかきをくふ事

▲さる人吉原へ行。女郎をみたて上りける。女郎もざしきへ来り、さかつきなどし、よその事共はなしける所へ、わかい者だいにかきをつみて、御さみしく御さ候はん。まつおなくさみに、と指出す。きやくもさあらぬていにて、しよくわひにかく持来るしかた、くわぬもしよしんと、かきを取てかはをむきくいけるが、しふきゆへ下におき、またよのを取。むけ共〳〵しふきゆへ、せん方なふみへにける。女郎もきのとくがり下へをり、若いものをよびさん〳〵にしかりける。いやかきのしふき事存申さす。おまへのめいわくはござりますまい、といへば、されはのふ、あの客衆なしみの客成はくるしからぬ事、ことにしよくはひの客あのかきをくわれたる、さだめてうらがとをからんと思ひてきのとく、といふたもいきすきておかし。

十八　こはいろつかひあやまる事

▲さむらい四五人吉原帰りとおぼしく、よきけんにまかせかへりけるが、あとよりもこへをかけ、まて〳〵おやのか

たきやらぬ、といふ。もとよりさむらい成は立もとり、身に覚へなけれ共、やらぬといはれてひきはせぬ、といふ。くたんの男、まつひらそさう申ました。わた(九オ)くしはこはいろつかいでござります、といふたもをかし。

十九　おゝしうどんをあつらへに来る事

▲さる所に、おゝしうどんをあつらへに来りける。たうじ心へ、さま〳〵しかたにてうけ取、おふしは帰りけるか、また立かへりてたうじをまねき、しりをたゝいてみせる。かつきもたうじもうな付は、おゝしはいそぎ行にける。跡にてかつきたうじにむかふて、今のおゝじかしりをたゝいたは、とふきゝ給ふぞ。たうじ、あれはせうしんしるといふこと、いへば、かつきかしらをふり、ちがふた事なり。あのしりをたゝいたは、うらよりもつてこうといふ事、といふたもおかし。

二十　絵馬のには鳥ときをつくる事

▲京の明神の神前へ、には鳥の絵馬をかきて上けるが、ふしきや夜の内の事□めん鳥の絵ぬけ、とび行ける。さんけいの人〳〵きもをけし、まことにかの筆なるべし、と皆々そのゑの跡ばかりをながめいていゝけるは、此おん鳥は女房なくしているはぶてうほうな鳥かな、とふ事ならずはときなりとつくるべし、と口〻にいはれ、此鳥ふしきやはゞたきして、とこへいかふ、とないたもおかし。(九ウ)

二十一　ねごとにおとろくぬす人の事

▲さる所のあきないやにいなか物をおかれけるが、此いなか物のねごとに、ふて〳〵、といふ。ねごとをいゝければ、てい主これを聞、ねごととはいゝながらやうじんのよきねごとかな。ばんよりみせの戸きはへねさせよ、とねさせける。ねるよりもはや、ふで〳〵、とねことをいゝしが、折節ぬす人いりてやざいをぬすみしが、ふて〳〵にをどろき、にけ行ける。てい主悦びいよ〳〵戸じりにふさせける。此事ぬす人聞付、いざやぬすみにゆかん、と四五人もよをし、戸をやぶり入にけり。是にもかまはす、ふて〳〵、といゝければ、ぬす人きみわるかり、しよせんきがゝりとて手ぬぐひを口へをしこめば、ねことやみにけり。ぬす人心やすしとて、我がちに諸道ぐいるいを取出んと思ひしが、しよせん此てぬぐいをぬかすは、いきかつまらん。ぬかはや、と思ひててぬぐいをぬきければ、よひよりたまりしふて〳〵か一ときに、ふて〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵、といふた。

二十二　ぬす人をなをすいしやの事

▲さる所に娘持けるが、よ方へゑんに付ける。つれあひし男よな〳〵出ては、あくる日帰りけり。此女房かしこき者にて此事他へもれ、うきめにあふもきのとく、またいとまを取といふとて、一夜そひたる男の悪名の付、きのとく。しよせんぬす人のなをる薬も有べし。い(十オ)さやいしやどのへ参りて薬をもらはん、といしやの方へ行てかくとかたる。

此いしやもしはらくくふうして、くすりをあわせ、女房に渡す。女房悦ひやがて薬をせんし、たて付〳〵のませける。かくとはしらて、おつとはひた物のみて出けるが、夜中しふんに帰り、ことをいゝてねいりける。女房も殊外薬がまはりたりとて悦ひ、立つけ〳〵のませければ、後には出る事をはすれけり。女房うれしくいそきいしや殿へれいに行。右のよしかたり、扨あのぬす人のなをり候薬はいかやうの御薬、ととといければ、されば薬とて外になし。あれわせきの出る薬なり。ぬす人といふ物はいきをこめてしのふ物成に、せきをせく故ぬすみにはいられぬ、といふた。

二十三　いなか物おにのすい物出す事

▲さる人いなか物をおかれけるが、有とき客二三人有けるに、てい主いゝけるは、おごをこわくしてすい物せよ、といゝ付けるにいなか物、承はり候、とみそをすりておにをこはくつくらんとて、うどんのこにておにをつくりて、やかてさしきへ出しける。てい主もきやくも、ふたを取みれば、さもすさましきおにのかたち、人〻おどろき、是はめづらしきすいもの、と申。てい主もあきれ男をよひ、そちは何と聞た、といへは、私はおにをこわくして出せとおつしやり候ゆへ、随分おそろしく致シ候、と申せは、てい主聞、みればあなた方のおにはてが有が、此方の鬼にてのない（十ウ）はとふした事じや。されば、そのきでござります。あなたのはとらくま、石くま、かなくまとうし、おまゑのはいばらきどうし。いふてつきへ立、大きなるはちに大おにをのせもち出、何れも□□がしゆ天どうじでこざります。皆様是をさかなに、一はしつゝたいらげあそはせ、といふたは、いなか物にはよきさいかくといわれた。

二十四　ばくちうちほうもんの事

▲有所にはくち打有けるが、きつふ打まけ旦那寺へ行、しゆつけと也。時〻はつちに出けるが、何がばくちのてめをおぼへ、よの弟子よりは米をもかはらけ一つ入るゝを、きやつは二度に三つ四つ入るゆへ、たくはつも大分取入る故、住持も殊の外きに入ける。有時ひかんに也ける。住持に向ひ、だんぎをとき給へ、と申せは住持、我は口ぶでうほう成故、だんぎをとかす、といわるれば、然らば私とき申さん、といふてかうさに上り、だんぎときけるに、さんけいおひたゝしく参り有。さんけいの内に五十あまりのおやち、おせうをみてくつくわらひける。おせうもにこくわらひながらとかれける。中にも八百やよりふぢもん上りければ、もとやをや成ば、あを物にてふぢを作りてよみ上る。あげ奉るふぢもんの事、きんせうぶだうのくり木をもつて是をさゝげ、とほつす右心ざす所あねよめなはき為(十一オ)(十一ウ・十二オ挿画)也。いつそのころより、うどぼより風のわつらいにてせりたて、ようぜうかんひやうつくくしといへ共、そのかい有のみにて、もしあゝかなしきかなや、あさつきがたに吹くる風にさそわれ、ついにきうりをはなれ、ずいきの泪もへ出る。わらび時にほうつきの口上はんの日は六でうのばんぐわんとうふのうは、ふやまつて申、とよみをさめすでにかうざよりおりんとすれば、かのおやぢさんけいの中よりつつと立、おせうしはらく是はいかに、といふて、手をひろげみせけり。すはほうもん、と参りの衆もかたづをのんでみていたり。おせうさはかす、ゆびを二ほん出す。おやぢ手をにきりみすれば、おせうゆひみつ出す。おやぢかぶりをふれば、又ゆび四ほん出す時に、おやち十ねんをうけゝれば、さんけいの衆がつてんゆかねば、くだんのあらましを住持に聞ければ、あれわほうもん也。おやぢがて

をひろげ、ごせうはいかにととふ。おせうこたへて、二ふつで帰るとことふ。てをにぎり、其よな事は手の内に有といふたにより、三そんのみだかとことふ。いや〳〵とかぶりをふつたゆへ、四ほんを出し、しての後はいわれ十ねんうけたとはなされ、皆有がたし、と帰りけり。其後おせうに聞は、あれわもとばくちのばにてぜに五百文借り有、今はしんしよもよからんと思ふて、いざや其銭取らんと、おせうしばらく五百のぜにかへさぬか、といふて手をひろげた。おせう□二百でかんにせよといゝける故、おやちはらを立、とんな(十二ウ)事いふてつらくはせるほといわれ、そんなら三百やらん。いや〳〵まいる事はならぬ。しからは四百□□□かんにんせよとゆつれ。四百ならはかんにんしよう、なむあみだ仏、と十ねんうけた、といふた。

二十五　蚊さかもりする事

▲さる人なつの事なるに、きやく大ぜいふるまひけるが、ことの外いつもとちかひ、こんばんはか□ござなき、と申せはてい主申は、皆〻の御ちそふ、私がさいかくにてかをとめおきました。何れもかべをごらんぜよ、と申に、皆〻立よりかべをみれば、かべに酒をふきてをきける故、か共一めんにかべにとまりいる。その中にとうけたる人いゝけるは、なんとかとの立きついよひやうかな、ちとおさへませう、といへば、かあいさつには是におさへられていつふれまする、といふたもおかし。

二十六　大名衆のおさへぎうにすむ事

▲さる大名衆のおさへしくじり、吉原へぎうにすみけり。折節女郎のともをして、あけや町へ行けるに、けんふつの客四五人通り、何くの女郎や名はいかに、と供の物をつかはし名をきけば、かのぎうこへをはりあげすさいらしく、三うらながと、とむかしのおさへのこへにていふたもぶしめいておかし。

二十七　さむらひけんくわにておくれ取事

▲さるそそう成男、さふらひ行あたり、いろ〳〵わびことしけれ共かんにんせす。今は男もせん方付、もはや此うへはかくご致候、とてしりをねちあけ、ずいふん我にかたれは、てからしだいにうち給へ、とくもをかすみにはしり行。跡にてさふらいはかみをなし、ゑゝむねんや、あの物めにせんをこされてむねんにそんずる、といふた。

二十八　しばいすきの男わんをかう事

▲あるしはいすきなる男、子をもふけ、あすはくいそめ也とてともだちをたのみ、わんをかいにやりけるが、もん所は随分きゝめの役者の紋をたのむ、とてかいにやりける。程なふわんをかい来るに、かつ山又五郎か紋。てい主事のふは

ら立、きゝめのうすい役者あるほと、はやりでのだん十郎が宗十郎、い三郎わかのいみ介。此内の紋をいふたにらちもない、とはら立る。此男いゝけるは、おれもきゝめの役者の紋かふてくるはしったれと、きかぬ又五郎が紋は、其子をいわふての事。きゝ役者の紋は、其子くい物をくふてあたつてたまる□□、又五郎はいつとてもあたらぬ、それでわざときかぬ役者のもんはかふてきた、といふた。

右此咄之本大坂露の五郎兵衛咄之本ヲ写板行令者也

芝神明前井筒屋板元